

# 中大落研初の 真打昇進

OB

探訪

## 中大で出会い 中大から夢を叶えた 才紫改め 桂やまと師匠

3月24日に東京・上野の鈴木演芸場で幕を開けた

「才紫改め三代目桂やまと 真打昇進襲名披露興行」で、  
桂やまと師匠が気っ風のいい高座を聴かせている。

本名を田中秀樹さんという、やまと師匠は1999年に中央大学を卒業した。

在学中は落語研究会で活躍、

今回の真打昇進は中大落研出身者では初の慶事である。



あたしが落語をナマで初めて聴いたのは19才、2年目の浪人の時でした。

うちは先祖代々、東京の荒川などで寄席も近いんですが、それまではまるっきり興味がなくてね。バンドブームの影響もあってずーっとギターを弾いてました。

で、2年目も有り難いことに親は予備校に行かせてくれたんです。一浪はみんなキャピキャピしてるんですけど、二浪って一気に窓際族になっちゃうのね……。だから予備校にいら

れないの。教室の端っこのほうで小さくなった。

そんな時、落語好きのあたしの爺ちゃんが病気で寝たきりになっちゃって。爺ちゃんは新聞屋さんが毎月くれる寄席の招待券を楽しみにしていたんです。寝たきりになっても新聞屋さんのご厚意で毎月2枚頂けど結局使わずに捨てる。また、たまって捨てる。そんなことを繰り返しているうちに、予備校へ行くのが嫌で、家にいるのも嫌だから、「もうどこでもいいや、これ持って行ってみるか」……

ほんとにやけっぱちで行ったんです。

そんな感じで足を踏み入れたのが、浅草演芸ホールなんです。そこですべてが変わりました。誰のファンでもなく、詳しいことはまるっきり分からない。たぶんその場、その雰囲気が衝撃だったんでしょうね。

超満員で2階席の一番後ろに座ってたんですけど、客がウエーブして笑ってるんですよ。「なんじゃこりゃ!?!」と思ってねえ。そしてトリの時には自分も一緒になってゲラゲラ笑ってたの。

私は中大落研に入って最高の仲間と出会えたから噺家になろうと思いました。  
.....  
そんな仲間の支えがあって修行を続けることができたと本当に思っています。  
.....  
中大に入学できたことを誇りに思っています。



いや、これがスカスカの入りで、全然うけていないところへ初めて足を踏み入れていたら、あたしは落語とは絶対に縁がなかったと思いますよ。これもタイミングだと思うんですが、そんなことがあってから月に2度ずつ、招待券を持っては浅草へ行っていました。

違う寄席にも行ってみたいと自分の小遣いはたいて上野鈴本へも行くようになって。自分にとっては、ちょうどいいストレス解消でしたね。それを商売にしようなんて、ひとつも考えてなかった。当時とはとにかく大学に行きたかったんです。

## 中大入学

おかげさまで合格して中央大学へ入学すると、新歓ってえのがありますよね。各サークルがペデ(遊歩道)下にペデ上に出店をずらーっと並べる。あたしはどこから声がかかってもパーン、パーンって近づく勧誘を手で払ってね、まあどこへも寄らない。まっつぐ目指したのが古いサークル棟に

ある落語研究会の部室。

コンコンと叩いて扉を開けると、

「何ですか?」

「入りたいんですけど」

「おっ、本当に!座って座って!!」

そこに先輩が3人いたんです。いろいろ話をしてくれて、「こんな活動やってんだよ、こんなこともやってるし、面白いよ!!」

一生懸命説明してくれるんですけど、何を聞いてもあたしはここしか入らないと決めてたんで、「そうですか、はい、はい」なんて答えてたんです。

「どうする? 入ってみる……?」

「はい、ここしか入りません!!」

「来たよ、こういう人が来ちゃったよ!!」

受付係として新生をなごませているんだろうなと思ってたこの3人が、実はすべての部員でした……。あたしが入った頃は落研も40年近く経ってましたが、つぶれかけてたんですね。

でもその年になんと1年生が10人くらい入って、一気に活気づいた。先輩たちも大事にしてくれて、あたした

ちも卒業まで10人中8人がちゃんと残りましたからねえ。またこの8人がライバル心の強いといったらない。「絶対負けない」って必死に稽古してすごく刺激がありました。

当時は立川談志師匠のテレビ番組『落語のピン』が人気でしたけど、噺家でみんなが知ってるのは談志師匠だったり、『笑点』(日本テレビ)メンバーだったり。落語ブームじゃないし、寄席へ行ってもスカスカだし、満員になるのはひと握りの大看板しかいなかったですね。

落研に入って今度は聴き手から演じ手になりました。前座名のような名前が先輩から付けられます。1年生は「せこだ名」、せこい・ださいの意味です。2年生は「ましだ名」、少しはましになるわけで。

3年生になると、先輩たちが継いできた名前を継がせてもらうチャンスが来ます。これも儀式があってね。あたしは「ふられ亭航海」という名前がすごく好きで、きれいでしょ。あたしが継げたら三代目の名跡。初代と二代目に会って襲名をお願いしまし



## 在学4年間、世の中の主な出来事

### ▽1995年(平成7年)

- 1・17 阪神大震災
- 3・20 地下鉄サリン事件
- 4・9 東京・青島幸男、大阪・横山ノック両氏が知事に

### ▽1996年(平成8年)

- 7・15 英国チャールズ皇太子とダイアナ妃離婚
- 9・18 大リーグで野茂英雄投手がノーヒットノーランを達成
- 11・24 巨人がFAで清原選手の入団を発表
- 12・17 左翼ゲリラ、ベルーの日本大使館を占拠「たまごっち」人気爆発



た。これもちゃんとした(?)審査があるのよ。

「どれだけ落語が好きなんだ?」

「お前の得意ネタは何だ?」

こういう話がまあ3割。あとの7割は酒が飲めるか飲めないか……。あたしもいろいろ聞かれて、さあそれからです。

いやあ飲んだ飲んだ、飲めないと名前は継がせてもらえないってえのがあるもんですから。気が付いたら知らない家において、「どこ? ここどこ?」二代目航海の自宅に泊めてもらってたんです。全然記憶にありませんが。後で聞いたら初代も二代目も居酒屋からの記憶がなかったそう……。よくぞ皆さまご無事で。

学生だけのサークルですと、学内のことしかわからない。早くに社会の人たちとつながるってえのは、落語研究会に入ってよかったと思うことの一つなんですよ。

大人と付き合うのは学生にとっちゃあ面倒くさい。学生は体は大人でも考えは子ども。

「ま、俺たちもこんな時があったから

なア。ちょっとだけ大人のしきたりを先に教えといてやるか」ってね。

これって有り難いことなんですよ。何にも知らないで社会にポーンと放り出されても「こいつはこんなことも知らねえのか」って馬鹿にされて終わっちゃう。それって悔しいじゃないですか。だからこんな関係は学生にとって必要なのだと思いますよ。

あたしは1年生の終わりには噺家になると決めてました。正月に爺ちゃんが亡くなってからいろいろ考えた。真剣に考えた。考え抜いた末に噺家に決めました。決して勢いで決めたわけじゃない。自分の一生だから。

それまでは勉強しか知らなかった。あたしは臨床心理士、カウンセラーになろうと文学部教育学科心理学コースに入学したんです。勉強していくうちに、こりゃ自分には向いてないなとわかって。

それと同時進行で落語の面白さがどんどん増して行って、1年生の終わりには、気持ちが固まって両親に言うわけですよ、「噺家になりたい」って。

父はね、

「冗談言っちゃいけねえ。何言ってるんだお前は。2年も浪人して、何考えてんだ!？」

「でも、俺は本気だ」と、とにかく引かなかったですね。

そしたら父が条件を出してきた。

「4年で卒業したらいいよ」

当たり前のような条件ですが、あたしは1年生の頃はずっと部室にいて、取れた単位は半分以下だったんですよね……。親にしてみればね、留年してくれて、どこかほかの会社に入ってくれたほうがよっぽどマシだと思ったんでしょう。

「4年で卒業したらいいよ、できなかったら絶対にダメ」

「はい、わかりました」と2年生からきっちり勉強して、4年生の終わりには卒業見込みができました。いま思えば早くにやりたいことが決まってポーンと言っちゃったのがよかったのかな。親が条件を出してくれたタイミングもよかったんでしょうね。

中央大学落語研究会はプロが代々教えてくれるという全国でも珍し



▽1997年(平成9年)

- 4・27 巨人の松井秀喜選手が100号本塁打
- 7・1 香港返還
- 11・17 北海道拓殖銀行が経営破たん
- 11・24 山一証券が自主廃業

▽1998年(平成10年)

- 2・7 長野冬季五輪開幕
- 7・25 和歌山で毒入りカレー事件発生
- 7・30 小淵恵三内閣成立  
映画「タイタニック」大ヒット

▽1999年(平成11年)

- 1・31 プロレスラー、ジャイアント馬場氏死去
- 3月 「だんご3兄弟」が大ヒット

いサークル。うちの師匠の才賀は歴代の指導役なんです。『笑点』に8年出てたし、あたしも『笑点』はずっと見てたし。

初めて会った時も「あっ、あの才賀師匠だ!」ってね。

強面でドスの利いた声ですが、懇切丁寧にいろいろと教えてくれて、相談にもよく乗ってくれました。

あたしもプロになりたいという話を2年生になった時、師匠の才賀に話したんですよ。

「うーん、誰の弟子になりたいんだい?」

「あの～、まだ何も考えてないんです」

「ダメだ、それじゃあ。一生付いて行く人をちゃんと決めねえと、俺たちの世界は務まらねえんだ。お前さん、まだ時間があるんだから、どんどん寄席へ行って、とにかく芸を聴いて、この人のそばにいたいなあ、と思う人を決めなきゃいけねえ」

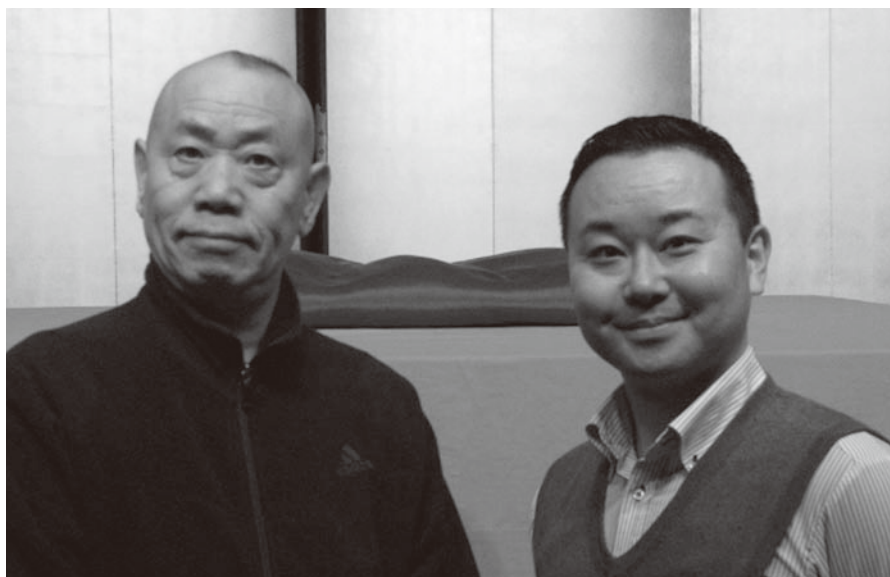
わかりました、ってんで、それから寄席へどんどん足を運ぶ。本当にいろいろ聴いてましたよ。そんな中、心配してくれてたんでしょね、

「おい田中、お前どうだい、その後は」

「はい、いろいろ聴きまして、～～師匠、～～師匠がいいなァと思います」

「うんうん、お前なかなかいい耳してんな。まだ時間あるから、どんどん聴きな」

師匠はあたしだけじゃなく、部員みんなを可愛がってくれて、よく飲ましてもらいました。師匠才賀の囁も聴きに行って、4年生になった時には「才賀師匠の弟子になりたい」と思うようになったんです。



才賀師匠(左)と2ショット

でも「4年で卒業しなくちゃダメ」という親との約束があったんで、そっちを優先しました。そう、うちの師匠には卒業するまで「弟子にしてください」って一度も言わなかったんです。

「よし、じゃあ大学やめてきな」って言われたら、親との約束が果たせないじゃないですか。これじゃ契約不履行だ。いかんいかん。だから親との約束を最優先しました。

卒業式の後、朝まで仲間と飲んで、また会おうぜなんて言ってみんなと別れました。夕方になって師匠を訪ねたら千葉にいるとわかって急に追っかけました。

「弟子にしてください! お願いします!!」

素直に驚いてましたね。

「へっ!? 俺か、俺かよ」って。

「うーん、まあ、ねえ、どうしようかねえ。親御さんとちゃんと話さねえとなァ。親御さんがいいよって言わない限り、俺はとらないよ」

これはずっと前から師匠が話してたんですよ。

「俺たちは誰でもできる商売じゃねえんだ。タレントじゃないから。師匠は

弟子の命を預かるからな。親や保護者の了解がない限りはとらない」

入門願いに行く前に、両親にはその話をしてあった。で、やっぱりそうだった。

千葉から東京に帰って、

「親、呼べ」と言われて、すぐに両親が来てくれて、いろいろと話して、

「いいんですか、大切なお子さんを。大学まで出して。水商売といっても売れるか売れないかでこんなに差のある商売もないし、売れる保証すらない。修行は昔から厳しいし、体だって壊すかもしれない、野垂れ死にするかもしれない。どうです、よろしいんですか?」

それを聞いた父が言ったことをはっきり覚えてます。

「当人がなりたい商売につけることほど幸せなことはないので、お願いします」

すかさず師匠が「はい、わかりました。弟子にしましょう」

その後も師匠に、

「お父っあんがそう言って頭下げたから、弟子にしたんだ。親に感謝しろ」と、よく言われましたねえ。

## 入門から真打へ

それまでは相談に乗ってくれる、ごちそうしてくれる、優しいおじさんだと思ってたんですが、入門したとたんガラッと変わって。プロとアマチュアは違う。アマチュアの芸なんて、何の役にもたたねえ。それを忘れさせるところから始まって。

教えるほうも気力、体力いっぱい使いますからね、大変です。

2ヶ月間は名前もくれなかったし、噺も教えてくれなかった。ただただ朝から夜中までずっと叱られてましたね。

うちの師匠は出歩くのが好きで、家にいることが少なかった。あたしは師匠が行く先々でそばにずっといるわけですよ。師匠は自衛隊の募集相談員をやってましてね、上野に募集事務所があって。15年以上前ですが、当時の所長が師匠のことを大変気に入ってくれて、「才賀師匠が私の地区にいらっしゃるなんてとてもうれしい、ご自由にお使いください」ってね。

そしたら隊員の皆さんもあたしのことを鍛えてくれるようになって。社会的な礼儀だとか、体力的なこととかね。みんな動きが速いし、頭の回転もいいし。で、シャレがわかる。すごく濃密な4年間でしたね。すべての糧ですよ。

入門から半年後に楽屋入りした時は、正直ラクでしたよ。ほんとラクだった。「なんでみんな止まってんだろう??」ってくらいで。あたしは動かないと気が済まなくなる。タターって動きまくる。結果的にそのおかげで、芸人の諸先輩からいっぱい可愛がってもらえましたね。

前座のうちは毎日師匠の用事をこなして、毎日寄席で働きます。4年間休みはありません。ええ、一日もね。だから気を抜く暇がないのよ。いや、気を抜いたら破門だもん……常に緊張感を持って働いてましたね。

二ツ目になると羽織を着て、「落語で独りで稼げるようになれ」と。師匠のそばにいるよりもどんどん飛び回らないと、今度は真打になったときに飛べない噺家になっちゃう。シビアな世界ですよ。

やりがいですか？ 自分の思い描いた通りにできたときは、やりがいを感じますね。お客さまに左右される自分がいたりすることがあるんで、それはダメなことなんです。自分がやりたいことをやり通す。とても大切なことだと思いませんか？ 何にでも通じることだと思うんです。

あとは自分のビジョンが近頃はっきりしてきたんです。それまで微妙なところがあって。まだ固まっていないということですね。

固まりつつあるのは、「こうやろう」ってえのがカチッとやれるようになってきた。その通りにやれば、正解かというところもあるんですけど。

一番はお客さまが喜んでるのがいいわけで。初めて落語を聴く方がいっぱいいらっしゃる。あたしが初めての場合もある。とにかく落語が好きになっていただければいい。それがあたしじゃなくても。

自分も落語が好きだから生業とさせていただいているわけで。落語って本当に面白いですよ。あたしはそれを知ってるからはっきりそう言える。あたしもまだまだこれからなんで、今後ともどうぞよろしく願いいたします。



略歴／1974年8月30日、東京生まれ。都白鷗高一中大文学部。1999年に桂才賀師匠に入門。2003年二ツ目昇進。14年春に真打昇進した。01年に東京寄席演芸の新人賞に当たる「第6回岡本マキ賞」受賞。12年さがみはら若手落語家選手権優勝。中大落研の指導役も務める。

### 1年生からのライバルは

「いまも落語をやっています。年に1度、『東京無銭』という社会人落語会なるものを深川(東京)で開きましてね、お客さまが200人くらい入る。私はゲスト出演として呼んでもらっています」

### 真打昇進襲名披露興行

3月24日、30日 鈴木演芸場

4月4日、7日 新宿末廣亭

4月11日、19日 浅草演芸ホール

4月23日、27日 池袋演芸場

5月11日、15日 国立演芸場

### 高座ではメガネを外す

普段はおしゃれなメガネをかけている桂やまと師匠。高座ではメガネを外してしまう。「前のほうのお客さまの顔は見えますが、後ろの席のお客さまは見えません。見えなくてもいいんです。噺家は話術でお客さまの頭の中に、噺に出てくる八つあん、ご隠居や長屋ぐらしを想像していただくわけですから。そこにメガネは必要ありません」本誌は、やまと師匠のメガネ&私服姿を撮影した。珍しいショットである。

